

― 特集／漱石来熊二二〇年 ―

グレン・グールドが愛した『草枕』

跡上 史郎

はじめに

グレン・グールドは漱石の『草枕』をこよなく愛した。クラシック界の伝説とも言える彼がなぜそうなるに至ったのか。そしてそれは、熊本のわれわれにとってどのような意味があるのか。

かつて『草枕』は旧制中学校時代を中心として、国語教科書（読本）の定番教材であった。しかし戦後になってからその地位を襲ったものの一つは『坊っちゃん』である。その知名度、親しみやすさに基づいた松山の観光的成功は言うまでもない。

一方、『草枕』を擁する熊本は、その本来の価値を十分に活かしきれているとはいえない。多くの人々にとつては、「素晴らしいのかもしれないが、自分には関係ない」ものとして受け止められてしまう傾向にあるように思われる。

『草枕』がいかにも不利なのは、その難解さである。それでもなお『草枕』の意義を熊本において共有し、さらにそれを対外的に発信していくにはどうしたらよいか。その解答の一つとして、直接『草枕』について論じるのではなく、外部における高い評価を逆輸入するというやり方があるのではないだろうか。

― グレン・グールドは何者か

グレン・グールドは、極めてユニークなカナダのピアニストである。

彼のステージ・マナーは独特で、それが好奇の的となり、またときに批判も受けました。ぼさぼさの髪、くたびれたダークスーツで舞台に現れると、丈の低い椅子（約三七センチメートル）に腰掛け、下にブロックを敷いて鍵盤の位置を高



グレン・グールド

くしたピアノに、前かがみで向かう。足を組み、鼻歌をうたいながら演奏し、片手が空くと、他方の手を「指揮」した。こういった奇矯な振舞いは聴衆を当惑させましたし、おもしろがらせました。

彼のスタイルやマナーがおかしいのは、若い頃から天才として活躍し、子ども時代からのやり方を変えなかったからである。その演奏は素晴らしく、専門家から高い評価を受け、世界中にファンがいた。

グレン・グールドが没した時、彼が残した最後の伝説は、枕元に残された書物であった。「聖書とともにあったのは、書き込みをした夏目漱石の『草枕』だった」。これは定説化しているようであるが、宮澤淳一は、さらにグールドの助手レイ・ロバーツから新たな証言を引き出している。「聖書はグールドの死後、彼の父親が置いたのだそうです。つまり、グールドの最後の日々に枕元に置かれていたのは、『三角の世界』一冊だけだったのです」。いかに『草枕』がこの稀有な天才芸術家の心を捉えていたかを物語るエピソードである。

グールドはなぜ『草枕』の愛読者となったのか。一九六五年、アラン・ターニー (Alan Turney) 訳の『草枕』*The Three-Cornered World* (London: Peter Owen) が刊行されるが、グールドがこの本に出会ったのは一九六七年、奇しくも漱石生誕百年の年、ウィリアム・フォォーリー教授との出会いによるものであった。

「教授は当時読んで、大いに感動を受けた夏目漱石の『草枕』英語版の話をした。教授は後日この本をグールドに送るのだが、これはこのピアノストの生涯を通じての愛読書となるのだった。後年グールドはこれを二十世紀最高傑作の小説の一つと公言して憚らず、従姉にこの本を丸々一冊電話で朗読して聞かせたほどであった」。

一九八一年十二月、グールドはカナダ放送協会（CBC）のラジオで『草枕』第一章の一部を朗読する。そして一九八二年に死去し、前述の通り枕元には『草枕』だけを残す一方、遺稿からは『草枕』ラジオドラマ化の構想メモ（志保田の娘のメモ―主題の分析）が見つかっている。

二 世界最先端の小説「草枕」

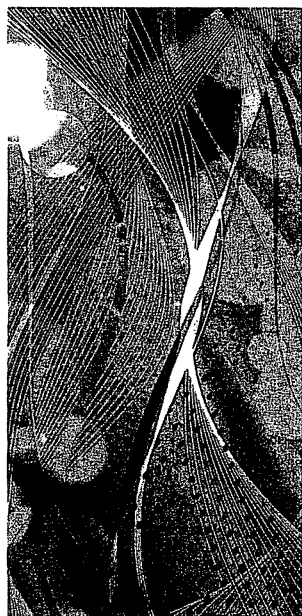
「草枕」九における「小説も非人情で読むから、筋なんかどうでもいいんです。こうして、御籤を引くように、ぱつと開けて、開いた所を、漫然と読んでいるのが面白いんです」という箇所はあまりにも有名であるが、これを見てもわかるように、「草枕」の最大の特徴は、一九世紀西欧小説批判の小説であるということである。「御籤を引くように」というのは、通常の小説に対して、その組立に従わない読み方をすることである。では、通常の小説に対して、その組立に従わない書き方することは可能か。答えはYesであろう。「山路を登りながら、こう考えた」という始まりが示すように、『草枕』は画工の「人の世」に関する思索、芸術に関する思索が連綿と続く。話の流れや展開が阻害される。

「レッシングと云う男は、時間の経過を条件とし

て起る出来事を、詩の本領であるごとく論じて、詩画は不一にして両様なりとの根本義を立てたように記憶するが、そう詩を見ると、今余の発表しようとなせっている境界もとうてい物になりそうにない。余が嬉しいと感ずる心裏の状況には時間はあるかも知れないが、時間の流れに沿うて、逐次に展開すべき出来事の内容がない」（六）という画工が頼りにしているのは、作中にたびたび出てくる俳句であり、また、同etcそれ以上の重みで参照される漢詩である。これらは西欧の詩よりも画に近いものとして捉えられており、話の筋が重視される西欧小説とは対極の扱いである。よつて、「時間の経過」に逆らうかのような『草枕』を漱石は、「俳句的小説」と呼んだ。

「若し、この俳句的小説―名前は変であるが―、が成立つとすれば、文学界に新しい境域を拓く訳である。この種の小説は未だ西洋にもないやうだ。日本には無論無い。それが日本に出来るとすれば、先づ、小説界に於ける新らしい運動が、日本から起つたといへるのだ」。ここに表明されている漱石の野心は壮大である。

俳句的小説は俳句的小説であつて、俳句ではない。故に、たとえ消そうとしたとしても、そこには小説的な「筋」が生ぜざるを得ない。『草枕』は、なかなか形にならない画工の「胸中の画面」がどのような



経緯によって「成就」するに至るかというプロットを確かに持っているのだ。つまり、『草枕』は、時間芸術の枠の中で、非時間的な価値を追求する、非常に欲張りな実験なのである。実際、これには相当の無理がある。小説と俳句を同居させようというのは、水と油を混ぜようとするに等しい困難な試みだ。もし、無理でなければ漱石はもう少しこの路線の作品を続けていてもよかつたはずであろう。漱石の才をもつてしても、ほぼ一回しか成立しないような奇跡的な「小説のような何か」が『草枕』なのである。

三 グールドに学ぶ『草枕』の価値

『草枕』は、西欧に対峙し苦しみ抜いた漱石による挑戦的作品である。その難解さは、まさにこの点に

由来する。そして、グールドが反応したのも、ここであろう。画工もグールドも、世俗を離れて芸術的感興を追求し、伝統的な西欧の芸術を越える意思を貫く。

グールドの出世作となった『ゴールドベルク変奏曲』（一九五五年版）は、まさに「非人情」の傑作とも言うべき名盤である。グールドは、バッハの楽譜にある反復記号を無視し、疾走するかのようなスタイルで全体を統一した。通例六〇分超となるはずの演奏時間を、三九分弱に圧縮してしまったのである。それは、情感を排した中立的な、生演奏では不可能なスタイルだった。グールドはいくつものテイクの中から最良のものを選び出し、継ぎ接ぎするという手法によって、それを実現した。グールド自身によるライナーノーツには、「要するにこれは、終わりの始まりもない、真のクライマックスも真の解決もない音楽「……」なのである」と記されている。まさに、『草枕』のような「筋なんかどうでもいい」非人情さである。

日本とカナダの芸術的共通点があるとするならば、ともに西欧の文化の中心地からは遠く、西欧的伝統の分厚さに押し潰されずに、革新的なものが生まれる可能性があるということであろう。西欧世界の境界に西欧中心主義に疑問を抱く天才グールドがおり、西欧を超越しようとしていたとき、対岸の辺境から

もたらされた『草枕』が奇跡のような共鳴を惹き起こしたのだ。

おわりに

漱石の人気作品No.1と言えば、『坊っちゃん』かもしれない。しかし、広い視野で見ると、西洋音楽を極めた最高峰のピアニストをも唸らせ、虜にした『草枕』こそは、世界に誇るべき真の芸術作品である。二〇一五年は、グールドが読んだ*The Three-Cornered World*の刊行五〇周年ということで、大和日英基金に助けNo Damian Flanaganによるセシナー Glenn Gould



(写真はイメージです)

and Natsume Soseki が行なわれ、その模様はYouTubeの動画でも紹介された。海外でも注目度は高いと言えよう。

我々が、グールドを介してその世界的価値を正しく認識すれば、松山を凌駕するような「熊本の漱石」の可能性が開けるかもしれない。

(あとがみ しろう／熊本大学准教授)

【注】

- * 1 宮澤淳一「グレン・グールド 鍵盤のエクスタシー」『知るを楽しむ 私のこだわり人物伝』日本放送出版協会、二〇〇八年四月
- * 2 横田庄一郎『草枕』変奏曲 夏目漱石とグレン・グールド』朔北社、一九九八年五月
- * 3 *The Three-Cornered World*『草枕』英訳のタイトル。作中の「四角な世界から常識と名のつく、一角を摩滅して、三角のうちに住むのを芸術家と呼んでもよからう」に基づく。
- * 4 前掲(宮澤)
- * 5 サダコ・グエン「北のピアニストと南画の小説家」、横田庄一郎編『漱石とグールド 8人の「草枕」協奏曲』朔北社、一九九九年五月
- * 6 「余が『草枕』『文章世界』一九〇六年十一月
- * 7 前掲(宮澤)